

ポンドは弱い通貨なのか、強い通貨なのか

ポンドの通貨としてのイメージは弱い通貨だろう。特に市場経験の長い人ほどそのイメージが強い。変動相場制が始まる前はポンド危機が何度も起き、そのたびにポンドは急落した。現在は100円台のポンド円が1000円だったことを覚えている人もいた。そんな昔ではなくても90年代初めの欧州通貨危機ではポンドが叩き売られ、ERMからの離脱を余儀なくされた。

そもそもユーロが誕生する前は欧州通貨の中でドイツマルク、オランダギルダーなどの強い通貨群に対して、ポンドはギリシャドラクマやポルトガルエスクードなどと共に弱い通貨群の代表的通貨とみなされていた。

こうした積み重ねでポンドの弱いイメージは作り上げられた。だからポンドドルがパーに限りなく近づいた時（85年）、多くの市場参加者は1ポンド1ドルを信じた。だがパーにはならなかった。その後もパーに近づきそうなきはあったが、切り返した。

今年夏、ユーロポンドはパーになるかと思われた。ユーロポンドが0.93に上昇した局面だ。

政治リスクに取りつかれていたユーロが、フランス大統領選のマクロンの勝利でそのリスクが急低下した一方で、BREXITの交渉の展望が開けなかった状況の時だ。ユーロポンドの上昇にいささかの障害はないように思われた。

だがパーにはならなかった。ユーロポンドはその後反転し、現在は0.88水準だ。何たる粘り腰。なかなか土俵を割らない。今後こうした傾向は続くのだろうか。

確かに英国のインフレ率は相対的に高く、金融政策の正常化は英国の方が早いと見ることはできる。だがECBも国債の購入の減額を決め、出口戦略に取り掛かった。ユーロ圏の景気も回復基調にあるので、19年以降とされる利上げが早まる可能性もある。

その点では金融政策はどちらが先行しても早晚追いつくと見ることができる。その点ではユーロポンドに与える影響は中期的には小さい。

となるとBREXIT次第ということになる。ただBREXITはその影響が見極めにくい。これまでも相場に影響を与えてきたが、それは交渉が進展するからポンドに有利だとか、進展しないから不利だとかの判断だ。その内容がどのような経済的影響を与え、為替の需給を変化させるのかの判断によるものではない。

よく見えてこないのだ。ならば見えてくるまでは為替にはニュートラルと考えてもいい。

となればポンドがパーにならない歴史的事実を尊重するしかない。ポンドは本当は強い通貨なのかもしれない。